

年間第20主日

福音朗読 ルカ 12・49-53

2022.8.14

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

聖書の一番最初、創世記に神様がこの世界をお創りになる物語という場面があります。最初神様は光と闇を分け、天と地を分け、陸と海を分け、と分けて、その上に今度は草木を芽生えさせて生き物をお創りになった。だんだんに世界をお創りになっていく様子が語られてますけども、それというのは、昔の人が科学の知識がなかったから世界ってこういうふうにしたんだらうってというような想像の中で出来た物語として理解していると、本当の意味が受け取れない。創世記、いつか一緒に読む機会があったらいいと思います。

そもそも創世記を書いたというか編纂して文字として残したのは祭司たちなんですけども、イスラエルの国が滅びちゃったあとに、でもそこからもう一回建て直そうというような思いで、人々に何が大切かを伝えようとして旧約聖書を編纂し始めたと言われてます。その中で、全部が失われたあともう一回どのよう自分たちが立ち直っていくのかという一つのテーマがあって書かれている、というようなことなんです。だから、闇と光を分け、天と地を分け、というのは、ただ自然のものがだんだん出来て行くっていうさまというよりは、いろんな価値観が混在しちゃってる、ぐちゃぐちゃになっちゃっている、それを一つ一つ、何が正しくて何が間違っているのか、そして人間は何をすべきで何をすべきでないのか、そういうようなことをはっきり区別しなければ、その上に一人ひとりの人生が成り立っていかないんだ、そういうような思いで書かれていると言われてるんです。だから、神様は憐れみ深い方だからって言ったときに、それは何でもいいんですよというようなことじゃないんです。

新聞で読んだことなんですけども、ずうっと子どもの頃から親から虐待を受けて来たある人が、でもそれでも自分の人生、立ち上がって生きて行く、ずっと傷を負ってるんですけど前向きな気持ちになった。それは、そういうような恨みを乗り越えてそれに支配されないで前を向きましょう、とか、あなた自身は大切な存

在だから、とか、そういうような言葉を周りの人がかけてくれても、立ち上がる力にはならなかった。まず自分が苦しみから一歩外に歩き始められた、その一番の言葉は、「あなたがされたことは悪いことだ。あなたは被害者である。そしてそれを行った人が悪いことを行ったんだ」っていう、自分のほうに原因があるんじゃないかとか、あるいは、そういうことで苦しむのは自分が悪かったんじゃないかとか、そういう思いの中にずっと囚われている。だけど、「あなたがされたことは悪いことなんだ」そして「それは犯罪だ」とはっきり言ってくれたことから、傷、トラウマから立ち上がる力を得た。それは、何が正義で何が悪かということをもっとはっきりさせて、その上にわたしたちの人生があるっていうのは、そういう大きな出来事の中に表われてきますけども、いろんなときにあるんじゃないかと思います。

教会が一番反対している考え方は価値相対主義って言って、「世の中には良いも悪いもないんだ。その時その時のそれぞれの人が良いと思っていることが良いんだ」みたいに、そういうものでいろんなものを曖昧にしてしまう。それには教会はいつも反対してます。やっぱり、正しいことは正しい。間違っていることは間違っている。そして、その中で、もちろん一人ひとりが、あるいは誰かが、それを完全に分かっているわけではないから間違いながら、でもやり直しながら歩いて行くっていうことが大事ではあります。誰かが自分が正しいと思っていることを神様が正しいって言ってるんだって軽々しく言ってはならない。「神の名をみだりに唱えてはならない」って十戒の掟の中にもあります（出エジプト 20・7）けど、神様が言ってるみたいにしてはならない。

でも、神様の前で、そして何が正しいことなのかということをもっと曖昧にすることなくちゃんと見極めながら、自分の人生も、そして社会も、形作っていかねばならないということが、今日イエス様が「地上に火を投ずるためだ」と。イエス様は本来だったら平和を与えるっておっしゃってる。そのイエス様の平和っていうのは、何か曖昧にして、「なんでもいいですよ、そのままで」みたいなことを言う、そういう平和ではないんだっていうことを改めて思い起こさせてくださる今日のみ言葉じゃないかなと思います。

今、日本の教会では明日まで平和旬間、平和のために考える。カトリック教会では平和の日っていうのは1月1日になってますね。「世界平和の日」。その世界平和の日は毎年教皇様がメッセージを出されます。ずうっと前ですけど、ヨハ

ネ・パウロ二世がある年のメッセージで「正義なくして平和なし。ゆるしなくして正義なし」というタイトルでメッセージを出された年があります。平和というのは正義が実現されなければ。何が正しくて何が間違っているのかというのをはっきりさせることを通してなんだ。しかし、わたしたちは完全にそれを、誰かが何が正義で何が悪かってことを把握しているわけではないので、お互い間違いながら、そして間違えたらゆるしを請い、また誰か間違った者をゆるしながら、神様の望まれる正義を実現していくためには、ゆるしが不可欠なんだというようなことをおっしゃったことがあります。

わたしたちの信じている神様は、わたしたちの願い事をただ黙って聞いているのではない。神様の望んでいることも言ってくる。そういう神なんだといつも信じてるわけですよ。旧約聖書の中には、「神が何を望んでおられるかはあなたがたに示されている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである」(ミカ6・8)とミカの預言書の中にはっきり出ている。このようなことは、ただ旧約聖書の預言者の中だけではなくて、いつもわたしたちがミサをお捧げしている中でいつも確認していることであると思います。

話がちょっとややこしくなっていましたけど、わたしたちもやっぱり自分の中にいろんな葛藤があって、神様が望んでいること、でも望んでないことをしてるなっていう思いもあったり、それもイエス様の投じてくださる火によって明らかにされて、そして大切なことを見極めて行く。それが辛いですね。今のままに留まってはならない、回心して歩んで行くんだっていうことだから、辛いわけですね。自分の中にも対立がある。古いままに留まろうとする自分と、でも神様に応えたい自分と、葛藤があります。それを曖昧にすることなく、そしてまた裁き合うこともなく、見出して行く。それこそが信仰の歩みなんじゃないかと思います。

だから、今日、繰り返しになりますけど日本の教会においては平和旬間、平和のために何が大切かを改めて考え、そして祈る時を過ごしている中で、わたしたちの社会が、そして一人ひとりの生き方を、イエス様の投じてくださる火の前にもう一回見直しながら神様に応えて行く。葛藤があるけれども、その勇気を改めていただきたいと思います。わたしたちは何度でも間違ってる、でもゆるされながら、しかしそのゆるしってというのは、曖昧にするっていう意味ではなくて、何度でもやり直す、そしてイエス様のほうに歩んで行くためのゆるしですね。だから、神様のゆるしに信頼しながら、でもそこにあぐらをかくのではなく、イエス

様に支えられて本当に大切なことを見極めて行く。そのような者になれますように、改めて主と共に歩む思いを新たにしてお祈りしたいと思います。